

鍵主良敬先生の学恩を謝する

織 田 顕 祐

二〇二〇年七月十日、鍵主良敬名誉教授がご逝去された。私にとっては生涯の恩師であられたが、最近の先生の言動は生死を超えたようなご様子だったので、もう直接お声を聞くことは出来ないことだけが今の私の正直な感覚である。先生のご生涯を概括することなど到底私にはできないが、役目なので微力を尽くしたい。

先生の略歴

先生は昭和八年（一九三三）六月九日、北海道に生まれた。後に北見市に移られるが、生まれは根室だったとお聞きした。昭和二十七年（一九五二）に北海道立北見北斗高等学校を卒業し、同年四月に大谷大学文学部に入学された。私はかつて同窓会機関紙『無盡燈』の「大谷大学と私」という特集で先生にお話を伺ったことがあるが（『無盡燈』一三三号）、その中で先生は入学当時の様子を「仕方なく大谷大学に入学したがある英語の先生にあってシヨックを受けた」と振り返っておられる。その後、仏教学科の山田亮賢先生のゼミに所属し、もっぱら『華嚴経』を学ばれた。山田先生の指導のもとで「菩提心」を課題として卒業論文をまとめ、そのまま昭和三十一年（一九五六）に大学院修士課程入学、同三十三年修士課程終了。同年四月大学院博士課程に入学し、昭和三十六年（一九六一）三月に同課程

満期退学して学歴を終えられた。その間、既に昭和三十三年（一九五八）年四月から仏教学研究室嘱託としての職歴が始まっておられる。

その後の職歴は、昭和三十六年四月大谷大学助手、昭和四十一年（一九六六）専任講師、昭和四十六年（一九七二）助教、昭和五十三年（一九七八）教授、平成十一年（一九九九）定年退職である。その間、昭和五十一年（一九七六）から学生部長、昭和五十九年（一九八四）から大学院文学研究科長、昭和六十二年（一九八七）から図書館長事務取扱などを歴任された。これ以外にも学科主任や研究室主任、各種委員会委員・委員長、真宗大谷学園評議員など様々な役職をお勤めであるが、あまりにも多いので以下は省略する。

先生のご研究

先生の最初の研究課題は、すでに触れたように卒業論文における菩提心の研究であった。その際、中国華嚴宗の法蔵の『華嚴経探玄記』や金子大榮先生の書物などから大きな影響を受けた。この点は山田亮賢先生の学風を色濃く受け継ぐものである。当初、卒業後は北海道のご自坊に帰って中学校の教員となることが決まっていたが、山田先生の強い勧めによって大学院に進学し、仏教における「心」の問題に取り組まれた。先生の最初の論文は「浄影寺慧遠の如来蔵思想」（『印度学仏教学研究』10¹、一九六二）である。その後、法蔵教学における「一心」の問題、浄影寺慧遠と法蔵の思想的関係、『十地経論』に関わる諸問題、『華嚴経』理解に関する根本的な課題などに関する考察を重ねられた。これら一連の研究は、『華嚴教学序説』（文栄堂、一九六八）という著書として実を結んだ。この書には「真如と真理の研究」という副題がつけられている。これは同書が中国の華嚴教学の教理的研究を目指すものではなく、「如来の真実とは何か」という先生の求道の姿勢の結実であることを表している。なおこれは先生が真宗大谷派の擬講請求論文として提出したものをもとにしている。そして同書は一九七〇年度の日本印度学仏教学会学会賞を受賞してい

る。こうした如来の真実に関する探究は、次の華嚴性起思想の研究へと展開した。「華嚴経性起品の研究」(『大谷大学研究年報』25、一九七三)を始めとして、性起思想を軸にした一連の『華嚴経』研究、性起品とその異訳経典を中心にした性起思想の原点の解明に取り組まれた。その成果は、学位請求論文「華嚴性起思想の研究」(一九八三)となり、これによって文学博士の学位を受けられた。

その後、先生は多忙を極めることとなり、研究業績は真宗大谷派夏安居の講録と単著の出版が主なものとなる。安居の講録として公刊されたものは、一九八三年『要説大乘起信論』(次講)、一九九二年『華嚴経管見』(次講)、一九九九年『顕浄土真実証文類要訣』(本講、これは後に『無上涅槃の妙果』(二〇〇六)として改訂出版された)、二〇〇八年『顕浄土真仏土文類窃以』(本講)である。単著を年次順に紹介すれば次のとおりである。まず、『国訳一切経経疏部十(華嚴経探玄記五)』(一九八四、大東出版社)がある。これは故坂本幸男博士が法蔵の『華嚴経探玄記』を如来相海品第二十九まで訳注されて亡くなったために未完成のまま中断していたものを先生が補遺されたものである。『華嚴経』は後半に至ると、普賢行品・性起品・離世間品・入法界品と連続し、『華嚴経』の最も重要な教えが説かれる。また法蔵の『探玄記』は『華嚴経』理解のための必須の注釈であるから、この部分を補って『探玄記』の国訳を完成することには重要な意味があった。次に『人物中国の仏教 法蔵』(一九九一、大蔵出版)がある。これは出版社の企画の中の一冊で、法蔵の生涯とその思想を紹介する目的を持ったものである。東京大学の木村清孝先生が『華嚴経』の受容と法蔵の生涯を担当され、鍵主先生が教学を簡潔に紹介したものである。この他に大谷大学の開放セミナーの講演録として『人間開華の旅——『華嚴経』のこころ——』(一九九九、大谷大学)がある。

近年の先生のご関心は、曾我量深先生の法蔵菩薩論の探究であった。当初、私がよくお聞きしたことで言えば、法蔵菩薩の四十八願のうちの第十一願を曾我先生が「分水嶺の本願である」と理解されたことに特に強いご関心があった。そこから「法蔵菩薩は阿頼耶識である」という問題に取り組まれた。先生は「私は金子大榮先生の華嚴を出発点

として卒論をまとめ、そして、最後に曾我先生の唯識に至りついたと感じております」(『無盡燈』一三三号)と述懐されているように、私がたまたまご自宅を訪問することがあった時も、常に曾我先生の著作と何かのコピーが机上に置かれていた。最近では浄土真宗の往生論をめぐって為された論難に対して激しく反応された。そしてその思いは遂に『近代真宗往生論の真髓』(二〇一八、方丈堂出版)という著書を産み出したのである。先生はこの書をしばしば「これは私の遺言である」と口にされていたが、この中には実に多くの課題が提起されており、晩年の先生の内心を窺い知ることができる。先生は、私たちが学生の頃から曾我量深先生のことを度々口にされていたので、これまでもずっと思索を重ねておられたに違いない。しかしながら、最近では「これまでは目玉が滑っていただけだった」と述懐するようになられた。亡くなる中でも「生きてまします法蔵菩薩」という論稿を書き続けておられる。これは曾我先生の法蔵菩薩論が鍵主先生において深化した独自の表現であると言える。「如来の真実とは何か」という先生の当初の問いは、このような形で結実したのだという感を強く持つのである。

一 学生としての先生との出会い

私は一九七三年に文学部仏教学科に入学した。その時の補導教員(現在は指導教員であるが当時は補導教員と言った)が鍵主先生であった。助教授になられて三年目にあたる。当時の新入生は総合1と総合2という授業が必修で、総合2は仏教を通して自分自身や人生観などを考え直すという目的を持った授業であった。それまでの「仏教入門」という内容とは異なる新たな概念による授業であった。その授業を通して私は先生に出会い、激しいショックを受けた。このことは『無盡燈』一三三号に「偉大な謎の先生」として紹介したので、ここでは繰り返さない。それ以来、私は生涯そのショックを引きずって今日に至ったのである。私は、文学部でも大学院でも多くの授業を拝聴したが、どの授業も先生独特の雰囲気があった。授業中に学生を前にしたまま三昧に入っておられると言えいいのか、ノートを

作ってそれを板書しながら講義するようなものではなかった。ある時、『華嚴經』に関する授業だったと記憶するが、黒板に「仏」という字を大書して、その字の周りをチョークでグルグルと線を引きながら、教壇を行ったり来たりで一時間が終了した。私の隣の学生は授業の意味が全くわからず、自分のノートに同じように「仏」という字を書いてグルグルと線を引いて板書を写していた。だからと言って学生を見ていないわけではない。別のある時、遅刻したのに悪びれもせず入ってきた学生に、突然「君は一体どういうつもりか」と、怒髪天を衝くような大声で叱られたことがあった。学生にとってはまさに晴天の霹靂であるが、先生はいつも真剣勝負だったのである。

先生は、囲碁が好きだった。趣味の域ではなく、石の生き死にが正にそのままのちのやりとりであるかのようにだった。私は「囲碁もやらない者に仏教がわかるか」と言われて、純情だったのでその足で碁石と折りたたみ式の碁盤を買いに行ったが、結局囲碁は身に付かなかった。だから私には仏教は分からないのかもしれない。学生がご自宅に伺うことも喜ばれ、いつも満面の笑みで私たちを迎えてくださった。そして私たちは奥様の手料理を随分ご馳走になった。休暇中も学生によく付き合っていた。先生から頂いた程のご恩を、私はどれだけ学生諸君にお返ししているかと振り返ってみると内心忸怩たる思いである。

これから学恩をどのように報謝するか

先に触れた『近代真宗教学往生論の真髓』には、空間的・三界内的に浄土を捉えて死後そこに往生するという凡夫の常識的な往生理解に対する綿密な批判がなされている。蓋し、本書の中心は「この身体は法蔵菩薩を感じるところの器である」という曾我先生の言葉に深く感動されたことにある。この言葉は曾我先生の『歎異抄聴記』の中のものであるが、「如来表現の範疇」としての「三心観」という概念を、衆生の側から表現したものに他ならない。この両者の結合が、先生の白鳥の歌とも言うべき「生きてますます法蔵菩薩」という表現なのだと思う。この論稿は現段階では

未公開であるが、最初に浄土真宗の往生の問題を考えるとときには、曇鸞の「無生の生」「無生法忍」という課題と重ねて考えなければならぬことが指摘されている。これはそのまま現下の私の課題となっている。曇鸞の「無生の生」という概念は、『般若経』と龍樹の中観思想を『維摩経』によって僧肇が再表現したものである。浄土教の「往生」がこうした大乘仏教の基盤とも言うべき思想によって成り立っていることはこれまでほとんど指摘されていない。また菩薩の「無生法忍」という課題は、大乘菩薩道の上でそれを初地において語る経典と、八地において語る経典とがある。両者の間には大乘仏教の思想的深化があることは言うまでもないが、こうした点もこれまでほとんど探究されてこなかった。つまり、親鸞に至る「浄土教」は、一体どのような思想的基盤に立つ仏教なのかという問題の根本が全く明らかになっていないという点を先生は指摘していることになる。こうした問題を一歩でも進めていくことが、先生の後を歩む私たちに託された課題であると感じている。先生、本当にありがとうございました。衷心よりお礼を申し上げます。